22 September 2020

日本版ゾンダーコマンド

低周波空気振動被害者の会　窪田泰

75 年前の忌まわしい記憶が甦ろうとしていた。ユダヤ人大量虐殺の舞台となったアウシュビッツ強制収容所の地中からガラス壜や箱に入ったメモが発見された。
ユダヤ人でありながら、ナチスの大量虐殺に加担させられた人達がいた。
現場でガス室への送り込みや死体処理などを担った人達、ゾンダーコマンドだ。
裏切り者として生きざるを得なかった彼等は最終的に口封じの為、殆どがナチスに殺されている。

過激な反ユダヤ主義を標榜したナチスは、ユダヤ人から家や財産を奪うだけでなく、民族毎消し去る計画を密かに進めていたのだ。
そこでは、高度にシステム化された作業が、全体が把握できないように夫々が細分化されていた。

ユダヤ教の指導者として人望が厚かったレイブ・ラングフスが残したメモだ。
*****
アウシュビッツへ行くと二度と生きて帰れない、そう囁かれていた。

夕刻前にナチスがやって来て、命令が下された。
それはアウシュビッツへ輸送すると言うものだった。
皆、ワナワナと震えていた。恐怖に怯え泣き叫んでいた。

息子は妻をジッと見つめていたが、大声で泣き始めた。
「パパ僕は死にたくない、何が何でも僕を助けて」
健康で溌剌とした小さなわが子を、迫り来る死から守ってやる術もなく、
ただ涙を流すしかない状況が、親にとってどれだけ辛く苦しいことか。

ユダヤ教の指導者として、人々に道徳を説く立場だったラングフス。
詳細と名付けたメモの束には、自らに向けられた非難の言葉を隠すことなく綴っていた。

目の前で大勢の人間がガス室に押し込まれた。
抵抗する者は射殺されるか犬にかみ殺された。

8 歳位の女の子がこう言った。
「人殺しはあっちへ行って、私の可愛い弟に触れないで」

幼い少年はこう言った。
「あなたたちもユダヤ人でしょう。仲間をガス室に送って自分だけが助かるなんて」
「どうしてそんなことが平気で出来るの？」
「〝殺人者〟として生きることが僕たちの命よりも大切なの」

アウシュビッツに到着した日、妻と息子と引き離されていたラングフス。

ガス室では、遺体が五層にも六層にも積み重なっていた。
女たちは子供を抱えて、男たちは妻を抱えて死んでいた。

私はこの中に妻と息子がいたことを後から知った。
私の恥はどれほどか

マルセル・ナジャリが残したメモだ。
*****
一体どうすれば、仲間を焼くなどということができるだろうか。
私は何度も一緒にガス室に入ろうと考えた。
しかし、その度に復讐心が押し留めた。
殺された父と母、そして姉の復讐の為、私は生きる。

地下には巨大な二つの部屋があった。
一つは脱衣所で、もう一つは死の部屋と呼ばれていた。
一つ目の任務は、送られてきた人々を迎え入れることだった。
自分の運命も知らずに、叫んだり泣いたりしていた。

次の任務は人々にシャワーを浴びるのだといって、服を脱がせてガス室に誘導することだった。
〝何も分からない振りをして〟

チクロン B に依って凡そ 20 分間悶え苦しみ、人々は窒息死させられた。

30 分後次の任務が始まる。
ガス室の扉を開けて、罪のない女性や子供たちを運び出すのだ。

その後行われるのは大量虐殺の痕跡を消すための作業だった。
ガス室の上には焼却炉があり、次の任務は遺体を焼くことだった。
人々は体の脂に依って焼かれた。

残った骨は叩き潰して、灰にするよう命じられた。
一人当たり 640g 程の灰が残った。その後、灰は近くの川に捨てた。
あらゆる痕跡を消すために。

同胞を裏切り、大量虐殺に加担したゾンダーコマンド達。
メモからは彼等の深い苦悩と葛藤が浮かび上がる。
追い詰められ、どうすることもできなかったゾンダーコマンド達。

ハインツ・クーニオは空腹に依って〝思考停止状態〟に陥ると言っていた。
「限界まで空腹になると、話すことが出来なくなる、何も考えられなくなる」と。

ザルマン・レヴェンタルのメモだ。
*****
「私はごく普通の人間だ」。
根性が腐った人間でも、残忍な人間でもない。
そんな私がこの任務に慣れていく。

誰かが泣き叫ぼうが、毎日のことだと無関心に傍観する。
生きるためには仕方がないと自分を納得をさせるようになる。
今、生き残っているのは二流の人間ばかりだ。
自らの命はどうでも良いと理由を探して取り繕っているが、真実は何が何でも生きたいのだ。

ユダヤ人を強制収容所への移送を指揮したアドルフ・アイヒマンは「私は、ユダヤ人を一人も殺していない」と言っていた。直接に手を下してはいないと言う意味では事実だ。

今、国家に依って勧奨される低周波音に依る被害が拡大を続けている。私が低周波音症候群被害者の会を主催した 2006 年 12 月 28 日からも、益々拡大している。

一端被害者になると、加害者に依って「低周波音被害はない」との大合唱が起こり、誰も救おうとはせず、世間の冷たさを一身に背負うことになる。

私の活動も、繰り返される加害者の虚言によって妨害されてきた。

国家が勧める風力発電、家庭用給湯器、重機が発する低周波音空気振動は諌止できない。

風力発電や道路建設、鉄道建設事業のアセスメントは低周波音による被害を認めていないし、給湯器による被害も回避できるとされている。

しかし一度、低周波音症候群を発症すると、同じ曝露環境に入れば再び症状は復元する。

聴神経の死滅を含め、元には戻らないのだ。

低周波空気振動被害は監獄もガス室もチクロン B のような薬物も不要だ。

音源を作れば後は、ただ黙って静かに見守るだけ良い。

苦しければ現地を去れば良いのだし、死者は焼き場で灰にしてくれるから、なんの造作もなく、朝飯前だ。

音源を作るには、サステナブル（持続可能な開発）が社会的要請であり、再生エネルギーが必要だと声高に謳うだけで良い。

機器を製造販売するのは業者であり、被害が出たらこれを苦情受付するのは末端行政の窓口だし、裁判に持ち込まれた場合は、裁判官が原告に因果関係を〝自己証明〟せよ、と放置する。しかも法的には何の規制もない。

末端行政はどこまでも〝被害〟ではなく〝苦情〟として扱い、低周波空気振動の記録を残そうとすると、音源側に〝いついつ測定をする〟とリーク（意図的に秘密や情報などを漏らすこと）して減弱操作を唆す。

低域の空気振動はヒトを突然死させる。

どんな殺人も許されることはないが、空気振動で人を殺害するなど以っての他だ。

空気振動は加害の痕跡を残さない。

氷の刃は溶けた水を残すと言うのに、形も色も臭いさえも残さない空気振動が加害する。

無論、殺害空間は自宅だから新たに監獄やガス室を用意して、閉じ込める必要もないし、その出入りを監視する必要もない。

国家は理工学士の嘘（橘秀樹、中野有朋）を利用して音源を普及し、社会は理工学士の嘘と衛生工学士の嘘、環境活動家の嘘を無条件で被害者に押付ける。自身の灰色の脳みそを使用しないままに。

音源は拡大の一途であり、被害の判定は旧態依然として参照値（閾値論）が幅を利かすのだ。

理工学士の嘘（岡田健等）は第一に〝重篤な疾患は医師が判定（診断）する〟のであり、第二に〝1Hz の音は 100Hz の音よりも 100 万倍伝播力を有している〟のだが、理工学士は低周波音被害を証明する低周波音記録を、医師には届けない。恰も自分が低周波音被害の専門家であるかのように振る舞う。何より被害地の低周波空気振動を調査しないし、しても公開はしない。

衛生工学士（松井利仁等）は、20Hz 未満は聞こえないという超低周波音の嘘を利用しつつ、参照値が有効という嘘を吐く。20Hz 未満は大幅に補正を加えるH特性を掲げて上半規管裂隙症候

群（SCDS）の有症者が被害を訴える可能性が高いと言い「有症者でなければ一般の人は無関係だから」と言って、風車を普及させようとする。元はと言えば彼等の嘘から風力発電はアセスの対象になり、アセスが成立して被害が拡大したのだ。

そもそも風車の基音は 1Hz 以下に発生するにも拘らず、参照値や感覚閾値は 1Hz 未満を対象としていない。

社会がロボット化しているのは再エネと言う考え方によるものだ。地球は温暖化していないのにその責任を二酸化炭素に押付けて、脱二酸化炭素を宣う。

NHK 等のマスメディアが〝識者（学者）がこのように言っている〟と繰り返えされると、一般大衆は〝識者が言うことは正しい〟と近視眼的な結論を出す。〝学者が言うことは正しい〟又は〝西洋が言うことは正しい〟とされ〝西洋の学者が言うことは間違いなく正しい〟となり、「海外から来た優れた物品（話）」として扱われて上等舶来になってしまう。

世の東西を問わず低周波音問題に識者は居ない。過去には汐見文隆医師が居たが、今はただの営利目的の嘘吐きが居座っているだけなのだ。

西洋が正しいのではなく、学者が正しいのでもなく、人の心に適うものこそが正しいのであり、人の心に適うものこそが法なのだ。

その法は、未だ検討もされていない。

会の活動を開始して程なく、日本消費者連盟が音響コンサル（岡田健）がこの被害の専門家だという虚言者（茅ヶ崎のYが主導）を集めて、2009 年 5 月 2 日「低周波音と身体へおよぼす生理的影響はなぜ起きるか！」という集会を開き、オトシンアップキープなる集団を助勢する活動を始めて、公然と会の妨害活動をすると宣言した。

林留一が主宰する汐見文隆公式ホームページでは、汐見医師がこの被害の専門家だと言いつつ、卑怯にも裏で岡田を称賛し推奨して、汐見医師を裏切っていた。

松浦悠吉も汐見医師の業績をアピールする。その舌が乾かぬまま岡田を讃美し褒め上げて汐見医師を裏切っていたのだ。

もともと岡田健は音響コンサルとして稼いでいるのだから利益相反行為であり、一方（事業者）の利益になると同時に、他方（被害者）への不利益になる行為の実践者だった。

岡田の「風力発電事業に反対しない」との発言は紛れもなく低周波音加害者であり、音源の拡大は彼等の利益を誘導して、加害者を専門家扱いする低周波音被害者は精神障害者だとの言説にもつながる。

低周波音被害問題は音源に依っても細分化されてきた。

一緒に闘えないよう、分別するよう仕向けられてきた。

同じ低周波音被害者なら手を携えて闘えば良いのに。

一例を挙げれば、風力発電全国情報ネットワーク（武田恵世代表）の主たる活動メンバーである、熱川風車被害者の会（川澄透代表）が、「巨大風車起因の空気振動発生を確認しないまま、会ったことも無い多数の住民を、〝遠因性疾患〟であると汐見文隆医師が診断した」と事実無根の発言をした記録がある。解析 Data の日付は 2009.4.22、2009.4.10 で医師に診断を受けたのは 2008 年 3 月 28 日 29 日との主張だ。どんな名医でも、2008 年の 3 月に 2009 年の 4 月の Data で、つまりは未来の Data で診断することは出来ない。

ここで、川澄は参照値を風車被害者にだけ適用をしないようにと、つまりは他の音源の被害者や鉄道建設事業での被害者は取り残されるようにと画策した。

何故か、ディーゼルエンジンを搭載している重機に依る被害は、代替手段がないから認められず、公害としての風力発電は地域性があるし、風力発電全国情報ネットワーク（武田恵世代表）は「共闘は不利」と確信して差別したのだ。

川澄の嘘を利用して更に嘘を重ねたのが伊藤貴輝審査官だ。国家のウソは行政の嘘であり、国家基準として扱われる。

また、消費者庁事故調査室は、風車被害を門前払い同然に調査対象から外しただけでなく、調査したとするヒートポンプ（エコキュート）被害ですら、PPM（100 万件」に一人）の被害であり、当時の出荷台数約 450 万台から算出する被害者は大目にみても 5 人程度と考えられ、把握した 112 名の 95％は虚言者だったと報告した消費者安全調査委員会の中心メンバーの一人は、環境学を専門とする清水亮専門委員（東京大学准教授）だ。

ヒートポンプの卓越は 10dB 差であり、「宇賀委員長の記者発表は 73 件の内の僅か 5 件に対応関係があり、68 件を不知とした」という、エネファームの卓越は 6dB 差だが、何故ヒートポンプの 9dB の卓越は認めないのかの説明はなく、無論両者の被害判定に差があるのは何故か、説明はない。

仮に 31.5Hz や 63Hz が加害周波数であるなら、これを規制すれば給湯器以外での被害者も救われるにも拘わらず、再エネ拡大の為、飽くまでヒートポンプと家庭用コージェネレーションシステムという給湯器本体を対象にして、給湯器という銃本体から発せられる「空気振動」という弾は規制しないのだ。給湯器は家庭用だけでなく業務用もある。

さらに、消費者庁事故調査室にヒートポンプ被害を訴えた清水靖弘は、自身が「加害音圧レベル」と言う被害者の会が提供した、どこにもない〝新しい考え方〟で救済されたにも拘らず、その告知をせずに弁護士に利益誘導しているし、エネファーム被害を訴えて裁判まで起こした今﨑浩美は、汐見医師や被害者の会が被害を認めたという屋外の低周波音記録を基にして（被害判定は室内の記録で行う）、事故調査室でも被害は認定されずに、被害者の会に袖にされたといって会の

活動を妨害する。

彼等は、未だに音響コンサルと手を結び、利益供与をしている。

サステナブルと言う考え方は、国際的な研究・提言機関であるローマ・クラブが 1972 年に「成長の限界」を出して、このまま人口爆発と経済成長が続くと、食糧生産、資源、環境などの分野でさまざまな問題が起き、100 年以内に地球の成長は限界に達するというものだ。 しかし食料の充足は人口に左右されるから、人口増加を抑えなければならないし、人類がエネルギーの枯渇に直面しているという話も真実ではない。どんなものでも浪費をしないことは当たり前の事だが、どうやって人口を抑制するのかその議論なしに、つまりは片手落ちの議論に過ぎないし、「太陽光や風力のみで運営している企業は、地球上には 1 社も存在しない」のだ。

密度が低く不安定な再エネ電力は、必ず化石燃料を使っての代替発電を必要とする。

加えて、低周波音被害者は精神障害者として処理できるという明らかな差別がある。低周波音記録を把握せず低周波音被害を訴えた過去の数例が災いしてはいるのだが、再エネ拡大で死者が出ているにも拘わらず。ヒトの生死の問題をエネルギー獲得の問題に摩り替えるなど、実に愚かなことだ。

ハインツ・クーニオは極限の空腹に依って〝思考停止状態〟に陥ると言っているが、逃げ場が無くなった低周波空気振動被害者は、まともに話すことも考えることも出来なくなり、ただ加害者に対する〝怒りだけ〟が被害者の脳内を渦巻く。

「地球にやさしいこと」や「サステナブルであること」が求められていると言うが、なんのことはない、再生エネルギーを作るに際し死者が出ているのに、何がサステナブルか、何処が地球にやさしいのか。汐見医師は〝低周波音被害は全て国家犯罪〟だと、痛罵していた。

環境を守ろうとする人々の嘘に基づいた行動が、結局、さらなる環境破壊（人的被害）を引き起こしてしまうのだ。人々の「サステナビリティ」に向かう欲望は歯止めがない。

国家が最優先で守るべきものは、国民の命と領土の筈である。国民の命を守らない国家なんて、低周波空気振動被害者にとっては平和も安全も絵に描いた餅だ。

被害者の症状は頬から一筋の血が垂れる、或は腕が折れている等、目に見える症状は無いし、物理現象は専用の計測器が必要で、しかも詳細に分析しなければ判断が付かないから、理工学士の手を借りざるを得なかったりしてその場では分からずに、どうしても臨場感というか現実感が無くなる。

アウシュビッツのゾンダーコマンドと日本版ゾンダーコマンドの根本的な違いは、自分の意思で参加したか否かだ。

自ら日本版ゾンダーコマンドに加わった者達の日常は苦悩や葛藤とは無縁である。些かの懊悩

も無く自己省察もせずに。

日本版ゾンダーコマンドは自分と同じ日本人を差別し、聞こえない音として低周波音を浴びせる。自死か我が家を捨てる外ない低周波音被害者に、低周波音を浴びせる。

橘秀樹によれば、〝聞こえない音として低周波音が存在する〟から問題になったのに、これを〝聞こえる音として評価すると言う。しかも、これが国家の施策を決定して、今や環境省の資料からは、〝風車に低周波音は存在しない〟となっている。

自分が日本人の命を危うくしているなどと露ほども思わず、自分はいいことをしていると、嬉々として活動に没頭する人たちがいる。彼らには確かに音源を駆逐できる可能性があるけれど、そのことが事業者や国家の味方になることを理解していない。しかし日本版ゾンダーコマンドは、低周波音がどれだけヒトを傷付け、ヒトの生活を破壊しているかを充分承知している。

彼等（日本版ゾンダーコマンド）の行為が深刻な低周波音地獄を生み育ててきた。

低周波空気振動被害者の絶望は音響コンサルや環境活動家とってはチャンスであり、構造的に彼等の懐を肥やしてきた。

彼等はゴロツキやペテン師然としているわけではなく、見かけは紳士だが直接手を汚さない犯罪者なのだ。悪人ほど善人振るのが上手いとはよく言ったものだ。

「人盛んにして天に勝つ」現状は、いつまでも続かない。低周波空気振動被害者の希望が至急実現されることを望む。

以上

特定非営利活動法人 低周波空気振動被害者の会 窪田 泰
〒186-0004 東京都国立市中 1-7-76 (Yasushi Kubota)
Phone：042-571-2787 Mail：p-kichi5206@rainbow.dti.ne.jp